

昭和五十四年

## 日本思想史関係研究文献要目

凡 例

一、本要目には、昭和五十四年に発行乃至発表された日本思想史関係の単行本並びに雑誌・紀要論文を収録した。

一、本要目には、日本思想史関係の学術的な研究を選択収録することを原則としたが、一般読者向けのものも適宜収めた。

一、右のように選択した文献を、Ⅰ単行本目録 Ⅱ雑誌・紀要論文目録の二部に分け、次のように配列した。

ⅠⅡ部とも、文献をその内容によって、総雑・古代・中世・近世・近代に分け、さらにそれぞれに属する思想史関係研究文献を、一般・学問道德教育方面・宗教方面・文芸美術芸能方面・政治社会経済方面・その他の項目順に分類配列した。

単行本は、書名・著者名・発行所名の順、論文は、題名・執筆者名・掲載雑誌紀要巻号数の順に記載した。

一、本要目の作成には、東北大学文学部日本思想史学研究室所属の助手・大学院学生があたった。

一、日本思想史という学問の性格上から、研究文献の選択に迷うことが多く、短時日の間に作成したためもあって、文献の選択や配列に不備な点があるものと考えられる。大方の御教示をお願いする。

I 単行本目録

総 雑

日本思想論争史

今井 淳夫編  
ペリかん社

日本思想史読本

古田 邦光編  
東洋経済新報社

論集日本人の生活と信仰

大谷大学国史学会編  
同朋出版社

道の文化

山田 宗睦他  
講談社

家永三郎教授東京教育大学  
退官記念論集

同論集刊行委員会編  
三省堂

1 古代・中世の社会と思想

2 近代日本の国家と思想

石原謙著作集10

日本キリスト教史

石原 謙  
岩波書店

日本神道史研究

西田 長男  
講談社

5 中世編 下

6 近世編 上

歴史科学大系19

思想史 前近代

歴史科学協議会編  
校倉書房

聖徳太子信仰

仏教と民俗

金 治 勇  
春秋社

巫女の文化

五 来 重  
角川書店

霊と肉

倉 塚 嘩子  
平 凡 社

山折 哲雄  
東京大学出版会

古 代

日本神話の発見 上・下

川副 武胤  
読売新聞社

日本神話と中国神話

伊藤 清司  
学 生 社

敗れし者への共感

田 中 元  
古川弘文館

古代日本思想における  
△悲劇▽の考察

松 前 健編  
学 生 社

講座日本の古代信仰

2 神々の誕生  
松 前 健編  
学 生 社

4 呪禱と文学

土 橋 寛編  
未 来 社

古代日本文学と時間意識

永 藤 靖  
未 来 社

時間の思想

高 取 正 男  
教 育 社

古代人の生活感情

安 江 和 宣  
平 凡 社

神道の成立

岡 田 精 司編  
神道史学会  
(京都)

神道祭祀論考△神道史研究  
叢書▽

二 葉 憲 香編  
永 田 文 昌 堂

大嘗祭と新嘗

松 原 祐 善  
法 蔵 館

国家と仏教

池 田 源 太  
学 生 社

△日本仏教史研究1▽

末法燈明記の研究  
叡 山 学 会 編  
同 朋 舎

安念和尚の研究

池 田 源 太  
学 生 社

古代日本民俗文化論考

中 世

法然 その生涯と教え

細 川 行 信  
法 蔵 館

親鸞の思想

井 関 保  
桜 楓 社

歎異抄の思想的解明  
 寺川俊昭 法蔵館  
 日蓮と立正安国論  
 佐々木馨 評論社  
 その思想史的アプローチ  
 蓮如 森龍吉 講談社  
 神祇信仰の展開と  
 宮井義雄 成甲書房  
 日本浄土教の基調3・4  
 神皇正統記の基礎的研究  
 平田俊春 雄山閣  
 中世の教訓  
 籠谷真智子 角川書店  
 日本中世法史論  
 笠松宏至 東大出版会  
 戦国法成立史論  
 勝俣鎮夫 //

近世

江戸の思想家たち上・下  
 相良三之介 研究社出版  
 源了圓  
 道 近世日本の思想  
 野崎守英 東大出版会  
 石田梅岩の思想  
 古田紹欽 ぺりかん社  
 今井淳編  
 川原衛門 図書出版社  
 追跡安藤昌益  
 圭室文雄 雄山閣  
 大桑齊編  
 近世仏教の諸問題  
 入矢義高 講談社  
 10 寂室  
 古田紹欽  
 11 拔隊  
 市原豊太  
 15 無難・正受  
 源了圓  
 17 鉄眼

殉教と民衆 隠れ念仏考  
 米村竜治 同朋舎  
 江戸派国学論考  
 内野吾郎 創林社  
 国学史上の人々  
 丸山季夫遺稿集  
 刊行会編 吉川弘文館  
 伴信友の思想 本居宣長の  
 学問継承者の思想  
 森田康之助 ペリかん社  
 日本洋学史の研究5  
 有坂隆道編 創元社  
 大坂蘭学史話  
 中野操 思文閣  
 平賀源内 その行動と思想  
 塚谷晃弘 評論社  
 幕末の精神  
 片岡啓治 日本評論社  
 佐久間象山先生  
 新保田 収出 象山会  
 横井小楠研究入門  
 松井康秀 松井康秀  
 横井小楠とその弟子たち  
 徳永新太郎 評論社  
 叢書・日本の思想家48  
 山崎正道 明徳出版社  
 吉田松陰・西郷南洲  
 和田正俊 三省堂  
 近世民衆運動の研究  
 津田秀夫 三省堂  
 近世民衆思想の研究  
 庄司吉之助 校倉書房  
 幕末淫祀論叢  
 沖木常吉編 マツノ書店  
 ええじゃないか  
 高木俊輔 教育社  
 世直し  
 佐々木潤之介 岩波書店

近代

II 雑誌・紀要論文目録

明治国家の権力と思想	小西四郎編	吉川弘文館	日本思想入門	森有正 (荒木亭訳)	思想 六六五
近代日本の思想 I	本郷隆盛	有斐閣	シンポジウム・民衆の文化 と思想——その方法論をめぐって		歴史評論三五六
神々の明治維新	前田雅洋	岩波書店	日本中世史からの発題	峰岸純夫	
暗殺 明治維新の思想と行動	安丸良夫	岩波書店	日本近世史からの発題	津田秀夫	
文明開化の研究	松浦玲	刃境草書房	日本思想史の方法——宗教 思想を軸に	武田清子	『近代日本の国 家と思想』
福沢論吉の思想形成	林屋辰三郎編	岩波書店	日本の修史事業と古文書研 究	柴辻俊六	日本歴史三七四
裁判 自由民権時代	今永清二	劉草書房	日本の死生観とカトリシズ ム	小野寺功	世紀 三五四
秩父困民党	森長英三郎	日本評論社	仏教と部落差別	近藤祐昭	紀要(同朋学園 仏教文化研)一
中江丑吉という人 その生活と思想と学問	井出孫六	講談社	日本古典文学の特質	Donald・キーン	日本文化研究所 研究報告 一五
明治宗教思潮の研究	阪谷芳直編	大和書房	前近代の天皇	永原慶二	歴史学研究 四六七
明治キリスト教の流域 静岡バンドと幕臣たち	鈴木範久	東大出版会	時代構造とその近代化(II) ——文化社会学的試論	飯田義清	紀要(日本私学 教育研)二四二
日本のプロテスタント 一二〇年のあゆみ	太田愛人	筑地書館	今井淳・小沢富夫編『日本 思想論争史』	安蘇谷正彦	国学院雑誌 八〇—九
明治キリスト教会史の研究	片子沢千代松	日本YMCA同 盟出版部			
明治カトリック教会史研究 ——中——	高木一雄	キリシタン文化 研究会(発売 中央出版社)			
明治期のキリスト教 日本プロテスタント史話	工藤英一	教文館			

総 雑

高橋敏著『日本民衆教育史研究』	石島庸男	歴史評論三五三	寺院縁起の研究	堅田修	大谷大学研究年報 三一
高橋敏著『日本民衆教育史研究』	平山和彦	日本民俗学 一二四	“日本の道教”研究八十年	下出積与	日本宗教史研究年報 二
笠原一男編『日本宗教史』 I・II——世界宗教史叢書 一一・一二	宇佐美正利	日本宗教史研究年報 二	古代村落祭祀の史的位位置	沼田武彦	『論究日本古代史』
下出積与博士還暦記念会編『日本における国家と宗教』	山本世紀	日本宗教史研究年報 二	古代日本における改葬	角田文衛	古代文化 三一—七
桜井徳太郎編『日本宗教の複合的構造』	船岡誠	日本宗教史研究年報 二	古代播磨の石と石神—伊和大神研究のために	長洋一	神戸女学院大学論集 二五—二
吉野裕子『陰陽五行思想からみた日本の祭』	鉄井慶紀	民族学研究 四四—一	アマテラスの原像	鶴岡静夫	『古代中世の社会と思想』
桜井好朗著『神々の変貌—社寺縁起の世界から』	龍福義友	史学難誌 八八—九	神社の成立をめぐって	西田長男 (講演)	宗教研究 五二—三
学問僧と諸宗の学	石田瑞磨	東洋学術研究 一八一—四	出雲の神々と氏族	松井克祐	湘南史学 四
神祇信仰と道教・儒教—日本古代思想史の再検討	下出積与	駿台史学 四六	法興寺の創建	田村圓澄	『古代中世の社会と思想』
日本古代における仏教と道教—上—下—	新川登亀男	東洋学術研究 一八一—三、四	推古朝における仏教と仏教統制、および両者の関係について	伊藤瑞叡	大崎学報 一三—二
女人の罪障と神道	三橋健	季刊日本思想史 一二	日本思想史における聖徳太子の意義—国史編纂事業を中心として	縄田二郎	聖徳太子研究 一三
日本仏教と朝鮮	田村圓澄	東洋学術研究 一八一—一	聖徳太子の倫理思想について—勝鬘經義疏を中心として	石川正一	金沢経済大学論集 一二—三
古代・中世仏教における罪の問題	由木義文	季刊日本思想史 一二	女人成仏思想の考察—聖徳太子所釈の三経を中心として	龍村龍平	聖徳太子研究 一三
			法華經義疏並びに勝鬘經義疏撰述の問題をめぐって(1)	金治勇	聖徳太子研究 一三

古 代

聖徳太子伝の整理―『聖徳太子伝暦』成立以前を中心

田中嗣人

『日本書紀研究』 一一

大嘗祭試論―「親供儀礼」における神と王

黒崎輝人

日本思想史研究 一一

大嘗祭に関する一試論

和田行弘

『日本書紀研究』 一一

行基伝の形成

福岡猛志

日本福祉大学研究紀要 三九・三九

律令体制と国家仏教―特に護国経典受容の側面について

藤岳博昭

仏教史研究 一一

国分寺創建の詔の成立―井上薫氏の所説にふれて

伊野部重一郎

続日本紀研究 二〇四

国分寺の創建における隋・唐仏教の影響について

宮城洋一郎

龍谷史壇 七七

梵釈寺と等定

西口順子

史窓 三六

泊瀬と長谷寺再説―聖処形成の一考察

沼義昭

立正大学文学部論叢 六三

本地垂迹説受容の思想的背景

高橋晴俊

神道学 一〇三

修験道にみる神仏習合―北部九州における場合

中野幡能

東洋学術研究 一八―四

日本仏教における別所について

岩城隆利

名古屋学院大学論集人文・自然科学篇 一五―二

方違考

加納重文

中古文学 二四

『皇太神宮儀式帳』と『日本書紀』―倭姫命伝説と月夜見命神話を中心として

横田健一

『日本書紀研究』 一一

最澄の思想形成についての一視点

白土わか

大谷学報 五九―二

最澄と菩薩僧団―延暦廿五年官符と山家学生式

朝枝善照

竜谷大学論集 四一―四

最澄の梵網戒受容と本覚思想

白土わか

仏教学セミナー 二九

『聾聵指歸』と『三教指歸』と―空海の三教観

波戸岡旭

漢文学会会報 二五

慶滋保胤における仏教信仰とその思想―特に保胤の往生思想を中心として

藤本佳男

龍谷史壇 七七

平安時代における宗教的主体とその実践―「往生伝」にみる増賀の記事を手掛りとして

藤本佳男

国史学研究(龍谷大) 五

源氏物語にみえる齋宮記事の史的考察

所京子

神道学 一〇〇

平安末期における悪人往生思想について

小原仁

日本仏教 四九

宮廷詩人と律令官人と―嵯峨朝文壇の基盤―

後藤昭雄

国語と国文学 五六―六

古事記における他界観の比較思想的考察

山下太郎

比較思想研究 六

古事記の成立基盤と神祇官―別天神・天孫降臨神話の性格と女帝の後宮をめぐる―

三谷栄一

国学院雑誌 八〇―一〇

『記』『紀』の神仏譚―『記』『紀』に於ける神仏的記事の比較―

松田智弘

古代研究 一七

『記・紀』宇宙観の一考察 ―創生神話の矛盾―	山上 伊豆母	論集 二四 △帝塚山大▽	国風暗黒時代文学の位相 ―空海と勅撰集―	金原 理	日本文学 二八一六
記紀神話成立に関する一試 論―宝鏡開始章の「一書」 を中心―	三宅 和朗	日本歴史三七〇	古代神話における樂園 ―黄泉を中心として―	中鉢 雅量	東方学 五八
「日本書紀」神代巻の研究 ―一書の配列順序を中心と して―	野口 武司	国学院大学日本 文化研究所紀要 四四	神話と歴史―村落共同体の 原理と神話的幻想―	古橋 信孝	上代文学 四二
風土紀編纂の思想	志田 諄一	国語と国文学 五六―一一	神話と歴史	戸谷 高明	〃 〃
風土記と巡幸説話	志田 諄一	茨城県史研究 四一	古事記における神話と歴史 の問題	徳光 久也	〃 〃
「日本霊異記」における因 果の理法	八重樫 直比古	ノートルダム清 心女子大学紀要 文化学編三一―一	習合思想から見た憲法十七 条	藤田 清	印度学仏教学研究 二八一―一
日本霊異記論序説	黒沢 幸三	『論究日本古代 史』	律令的政治観の変質とイデ オログの動向―菅原道真 と三善清行の現状認識を めぐって―	山本 幸男	日本史研究 二〇四
説話文学を通して見た仏教 土着	梅谷 繁樹	四天王寺女子大 学紀要 一二	革命勘文・革命勘文につい て	佐藤 均	史報 一
源氏物語における時間意識 ―年始の諸相をめぐって	矢沢 勢紀子	日本思想史学 一一	日本古代法における首長法 と王法	小林 敏男	歴史学 別冊特集
古代歌学意識の発生 ―国文芸学前史の構想―	内野 吾郎	国学院大学日本 文化研究所紀要 四四	平安中期の入墓規定と親族 組織―藤原兼家・道長家族 を中心として―	栗原 弘	『京都地域史の 研究』
柿本人麻呂の空間・時間意 識―漢・六朝の賦詩との関 連において―	吉田 とよ子	上代文学 四二	平安貴族の政治意識―藤原 実資の小右記を中心に―	河北 騰	独協大学教養諸 学研究 一四
家持における時間認識より 思惟への道	青木 節子	上代文学 四二	重松信弘著『古代思想の研 究』	原田 隆吉	文芸研究(日本 文芸研究会) 九二
アメノシタシロシメス メラミコト―日本のことば と日本のこころ―	石田 一良	日本及日本人 一五五四			

池田源太『奈良・平安時代の文化と宗教』

朝枝善照 龍谷史壇 七五

重松明久著『古墳と古代宗教』

佐竹昭 史学研究一四二

真弓常忠『日本古代祭祀の研究』

西宮一民 皇学館論叢 一一一六

高取正男著『神道の成立』

島蘭進 宗教研究 五三一二

野口武司著『古事紀及び日本書紀の表記の研究』

高島正人 立正史学 四五

吉井敏著『ヤマトタケルをめぐる「古事記」論の方法的可能性』

神野志隆 日本文学 二八四

大島清著『万葉人の宗教』

田丸徳善 宗教研究 五三一

仏像と仏式齋会と—渡瀬昌忠氏『柿本人麻呂研究—島の宮の文学』を読む

中川幸広 万葉 一〇一

守屋俊彦氏著『続日本霊異記の研究』を読む

小泉道 万葉 一〇〇

阿部猛『菅原道真—九世紀の政治と社会』・『撰関政治』

石黒洋子 史海(東学大) 二六

速水侑『浄土信仰論』

藤本佳男 仏教史研究一一

目加田さくを著『大鏡論—漢文芸作家圈における政治批判の系譜』

田坂憲二 語文研究 四八

榎田良洪著『覚鑿の研究』

宮坂宥勝 史学雑誌 八八—三

中世

『玉葉』にみえる起請について—起請文発生期における二、三の問題

芝野康之 古代文化 三一—六

鎌倉時代の思潮—御家人をめぐる

多賀宗隼 金沢文庫研究 二五—一

俗人教育機関としての時衆道場—鎌倉末期・南北朝期を中心として

大戸安弘 関東教育学会紀要 六

南北朝期における武家の天皇観

田原嗣郎 季刊・日本思想史 一〇

夢窓疎石の偈頌と思想—「友社」の原型を中心として

名和弘彰 日本文学 二八—七

夢中問答集・中正子の文化思潮史的意義

丸山嘉信 研究紀要八佐賀女子短大 一三

足利学校本の研究(上)

結城陸郎 皇学館論叢 一二—四

細川満元と北山文化

米原正義 国学院雑誌 八〇—一一

戦国武士

坂田吉雄 季刊・日本思想史 一〇

百姓・宗教・戦国大名—中世から近世への移行をどうみるか

新行紀一 歴史評論三五—六

中世浄土宗研究小史

大橋俊雄 日本宗教史研究 年報 二

中世禅宗研究小史

広瀬良弘 日本宗教史研究 年報 二



中世前期における寺社の慣習法—南都の祓を中心に	清田義英	日本仏教史学 一四	親鸞研究の問題点—「悪人正機」説を中心に	横井徹	名古屋大学法政論集 七九
本覚思想と神道理論	田村芳朗	印度学仏教学研究 二八	親鸞聖人の太子信仰の形成と四天王寺	武田賢寿	真宗研究 二三
宇佐放生会について—『八幡宇佐宮御託宣集』再読	桜井好朗	年報中世史研究 四	親鸞と神祇をめぐる諸問題	嶋田法宣	竜谷教学 一四
中世宗教史における神道の位置	黒田俊雄	『古代・中世の社会と思想』	親鸞における地獄論の考察—地獄一定説の一視点	山崎龍明	武蔵野女子大学紀要 一四
中世石清水八幡宮における浄土信仰—本地阿弥陀仏説を中心に	新城敏男	日本宗教史研究 二年報	親鸞における政治と宗教—「消息文」の解釈の仕方に関連して	横井徹	名古屋大学法政論集 八二
「愚管抄」における王法と仏法	大隅和雄	『思想』 六五七	親鸞における否定の論理—悪人正因と悪人正機	熊田健二	『古代・中世の社会と思想』
『漢光類聚』における本覚思想の考察—「本来本心性」疑団解明の一視覚—2—	山内舜雄	駒沢大学仏教学部研究紀要三七	親鸞の宗教的主体の成立	二葉憲香	『古代・中世の社会と思想』
「中世仏教」覚書	奈良博順	長谷川仏教文化研究 年報 六	法爾自然と自然法爾—日本仏教の自然観の一考察	黒木幹夫	倫理学年報 二八
法然における業の思想	矢田了章	真宗学 六〇	歎異抄研究序説—歎異抄的親鸞像と念仏義について	山崎龍明	真宗学 五九
法然の思想構造とその歴史的位置—中世的異端の成立	平雅行	日本史研究 一九八	初期真宗教団の特質	細川行信	親鸞教学 三五
明恵年譜 —1—	奥田勲	宇都宮大学教育学部紀要第1部 二八	親鸞と一向一揆—下—	守本順一郎	季刊科学と思想 三二二
坂東本「教行信証」成立時期再考	重見一行	真宗研究 二三	日蓮—上—	〃	季刊科学と思想 三四
再説西方指南抄の編著について—奥書の解明を手がかりとして	靈山勝海	真宗研究 二三	日蓮における立正安国と靈山浄土	佐藤弘夫	日本文化研究所研究報告 一五
親鸞研究の根本問題—九つの問い	古田武彦	『古代・中世の社会と思想』	無住の謗法観—「沙石集」を中心として	倉橋観隆	日蓮教学研究所紀要 六

「正法眼蔵」に見られる在家・女人の成仏非成仏について

伊藤秀憲

駒沢大学曹洞宗宗学研究所・宗学研究 二一

鎌倉時代後半期に於ける曹洞禅の民衆化運動

鈴木泰山

愛知大学文学論叢 六一

中世禅林の一断面

古田紹欽

禅研究所紀要八

夢窓—2—10—

栗田勇

海一一(一一) (一一二)

虎関師錬の儒道観

久須本文雄

禅文化研究所紀要 一一

法華験記と元亨釈書との関係

黒川訓義

皇学館論叢 一二—六

講について(20)

居村栄

岡山大学教育学部研究集録五〇—一、二、五—

祭文にみる呪文「噫急如律令」をめぐって

奥野義雄

古代研究 一八

所謂中世祭文の流布主体は修験道・山伏の集団であるのか

松本啓子

奈良教育大学国文 三

併神慮也

中世における不思議の喪失と保持

位藤邦生

広島大学文学部紀要 三九

慈円と拾玉集

間中富士子

観見大学紀要第一編 国語国文学 一六

隠者文学の成立に関する一考察

松下道夫

国学院雑誌 八〇—二

鴨長明の異相往生観

刈部明子

二松学舎大学人文論叢 一六

発心集の成立

木藤才蔵

文学 四七—一

方丈記考—その無常観をめぐって

関口忠男

日本文学研究 一八

中世文芸にみる時間意識の構造—とくに「方丈記」と「愚管抄」を中心として

山内潤三

大谷女子大学紀要 一三—二

沙石集と無住

下西忠

国文学論叢二四

「撰集抄」説話の特質—歌の功德をめぐって

松本孝三

論究日本文学 四二

内乱期の文学—農民蜂起とその主謀者の像をめぐって

亀井秀雄

国語と国文 五六—五

戦国武士と文芸(学術研究の動向)

米原正義

学術月報 三二—八

戦国大名斎藤氏と茶の湯—稲場良通相伝の珠光流不住庵梅雪茶書

宮本義己

茶湯 一五

絵解きの源流と物語絵の展開

川口久雄

東洋研究 五三

しんとく丸の世界—上—

桜井好朗

文学四七—一一

鎌倉・室町期の芸能における「中世的」特質(1)

西崎専一

紀要八同朋学園仏教文化研 一

武家社会における加冠と一字付与の政治性について—鎌倉幕府御家人の場合

紺戸淳

中央史学 二

鎌倉幕府と寺社—関東御祈禱所をめぐって

綾仁重次

国史談話会雑誌 二〇

中世における非人施行と公武政権 丹生谷 哲一 歴史研究 八大阪 教大 一七

建武政権の法制—内閣文庫本「建武記」を素材として 森 茂 史淵 一一六

「梅松論」諸本の研究・補説 小川 信 国学院雑誌 八〇—一一

越前一向一揆の展開 小泉 義博 歴史評論 三五六

目崎徳衛著「西行の思想史的研究」 多賀 宗隼 史学雑誌 八八—八

西行への新照明—目崎徳衛「西行の思想史的研究」をめぐって 玉城 徹 短歌 二六一—八

高松弘次著「法然浄土教の諸問題」 幡 谷 明 仏教学セミナー 三〇—

奥田勲著「明恵—遍歴と夢」を読む 山田 昭全 国語と国文学 五六—六

網野善彦「無縁・公界・楽—日本中世の自由と平和」 阿部 謹也 歴史学研究 四六八

網野善彦「無縁・公界・楽—日本中世の自由と平和」 永原 慶二 史学雑誌 八八—六

網野善彦「無縁・公界・楽」によせて(1) 峰 岸 純夫 人民の歴史学 六〇

網野善彦「無縁・公界・楽」 山本 博文 論集きんせい 八東大・近世史 二

網野善彦著「無縁・公界・楽—日本中世の自由と平和」 横井 清 芸能史研究 六四

近 世

徳川義直の好学と林門の発展 和 島 芳 男 大手前女子大論 集 一三

藤原惺窩研究史 長 岡 麻 里 子 史泉 五三

中江藤樹と武士 高 橋 文 博 季刊日本思想史 一〇

中江藤樹の思想—いわゆる後期を中心として— 佐久間 正 文化 四二—三・四

熊沢蕃山の政治論小考—「大学或問」を中心として— 宮崎 道 生 国学院大学紀要 一七

熊沢蕃山の神道論—附論 岩越元一郎著「中庸新解」における神道論— 多 田 顕 神道学 一〇三

熊沢蕃山と岡山藩 竹 内 仁 子 東洋大(院)紀 要 一五

徳川光圀の死生観 西 山 徳 皇学館大学紀要 一七

山鹿素行の学校論に関する考察— 松 野 憲 二 明星大学紀要(人文) 一五

山鹿素行と老荘思想 中 山 広 司 芸林 二八—二

伊藤仁斎の詩と学問 大 谷 雅 夫 国語国文 四八—一二

恕とおもいやりとの間—伊藤仁斎の学問、その一端— 〃 〃 四八—三

仁斎学の性格 森 下 利 明 ばいでいあ 三

荻生徂徠の思想

—その人間観を中心に—

尾藤正英

東方学 五八

海保青陵と徂徠学  
—「文法披雲」に着眼して—

八木清治

日本思想史研究 一一

甲斐への紀行にみる人間徂徠の片鱗

河村義昌

国文学論考一五

帆足万里の西洋理解と儒教

後藤広子

日大精神文化研究  
・教育制度研究紀要 一〇

徂徠学の礼楽観

田尻祐一郎

日本思想史研究 一一

新井白石における時代区分

福永弘之

佐賀女子短大紀要 一三

広瀬淡窓の教育思想  
—近世教育思想研究Ⅲ—

鹿毛基生

大分大(教育)紀要 五—四

闘いの肖像

—評伝新井白石—一六完

入江隆則

新潮 七六—二

会沢正志斎の『及門遺範』  
について  
—否定の論理とナッシュリズム—

今中寛司

文化史学 三五

白石と鹽竈社考

—白石・洞岩・木齋—

荒川久寿男

皇学館論叢 一一—一

後藤松陰の書簡

平野翠

大阪府立中之島図書館紀要一五

新井白石の南北アメリカ大陸観

宮崎道生

日本歴史三六八

月田蒙齋の生涯と思想

難波征男

佐賀女子短大紀要 一三

増田立軒の事跡と学問

—下—

竹治貞夫

徳島大学学芸紀要(人文)二九

佐久間象山の思想  
—天保期をめぐって—

磯原真行

日本思想史研究 一一

晩年の服部南郭

日野龍夫

国語国文 四八—一一

近世初期学校教育の研究  
—岡山藩校を中心として—

沖田行司

文化史学 三四

宇佐美瀧水伝記考証序説

—上—

佐野正巳

人文研究(神奈川大学人文学会) 七三

彰考館における学問吟味について(1)

鈴木暎一

茨城史林 八

三浦梅園と明代儒学

—一—

柳沢南

倫理思想研究四

幕末朱子学の性格

宮城公子

四天王寺女子大紀要 一二

三浦梅園の哲学

—極東儒学思想史の見地から—

島田虔次

東洋史研究 三八—三

正名論と名分論  
—南朝正統論の思想的性格をめぐって—

尾藤正英

『近代日本の国家と思想』

尾藤二洲の学問観・教育観

石津靖大

女子聖学院短大紀要 一一

備前藩における非人と日蓮宗不受不施派について

妻鹿淳子

日本史研究 二〇八

寛政期一異学者の思想  
—亀井南冥について—

辻本雅史

光華女子大・短大研究紀要一七

江戸幕府積奠の終焉	須藤 敏夫	国学院雑誌八〇	昭通和尚—その生涯と思想	上田 靈城	密教文化一二五
木食観正と小田原藩 —酒匂川流域の民間信仰 を中心にして	西海 賢二	小田原地方史研 究 一〇	昭通和尚—その生涯と思想 —続	上田 靈城	密教文化一二六
道二教学と仏教	高神 信也	印度学仏教学研究 二七—二	三浦浄心について	水江 漣子	三浦古文化二四
江戸の民間信仰 —金毘羅と富士信仰	宮田 登	月刊文化財 一八九	△近世の試論—近世的寺院 の形成過程	木村 寿	ヒストリア八一
十三まいり信仰の成立と伝 播	中村 雅俊	日本民俗学 一二二	慶長・元和期における寺院 法度—その再考への一試論	西脇 修	仏教史研究一一
近世の四国遍路 —時代的推移と出自地域	新城 常三	日本常民文化紀 要(成城大)五	近世における島信仰と民衆 意識	藤田 雅一	史海 二六
歌舞伎の題材におけるイン ド思想の内容	中村 元	心 三二—六	如来教の開教と藩政転換期 の民衆意識	神田 秀雄	歴史評論三五—
御霊信仰と荒事芸	諏訪 春雄	文学 四七—八	駿河・遠江のええじゃない かと「世直し」	枝村 三郎	静岡県近代史研 究 二
西鶴の武士道観 —「武家義理物語」の序 文について	田中 邦夫	大阪経大論集 一二七・一二八	豊臣秀吉の日本神国観—キ リシタン禁制をめぐって	海老沢 有道	社会科学ジャー ナル(国際基督 大) 一七
「武家義理物語」に描かれ た「義理」 —中国説話を原拠とする 話を通して	田中 邦夫	大阪経大論集 一二九	キリシタンにおける救贖の 理解	〃	季刊日本思想史 一二
西鶴における義理意識	白方 勝	愛媛国文と教育 一〇	キリシタンのコンフラリヤ (兄弟会)—迫害下におけ る抵抗の組織	〃	アジア文化研究 国際基督教大学 学報三一A—一
寛文期の岡山藩政 —池田光政の宗教政策と 致仕の原因	田中 誠二	日本史研究 二〇—二	寛文期尾張藩のキリシタン 禁制について	清水 紘一	徳川林政史研究 所研究紀要五三
抜参り考	新城 常三	政治経済史史学 一六三	「聖体」の教理とキリシタ ン—16・7世紀の日本布教 時代における—聖体の秘 跡—崇拜の教理的根拠と その図像	ドベルグ美那子	キリスト教史学 三三三
近世末東本願寺学僧の教化 とその受容—香樹院徳竜と 近江商人松居遊見	上場 顕雄	地方史研究 二九—六	隠れキリシタンの儀礼の構 造—隠れキリシタンのオラ シヨに関する一考察	三宅 宣幸	研究論集(開成 中・高校) 七

豊臣秀吉の伴天連成敗朱印  
状について | 天正15年6月  
18日付朱印状の批判

岩澤 愿彦

国学院雑誌  
八〇—一一

鈴木正三とキリスト教

藤吉 慈海

禅文化研究所紀  
一〇〇

古松軒の林子平批判

板坂 耀子

近世文芸 三一

上田秋成と陶淵明 | 中国文  
学と日本文学との関係

堺 光一

皇学館大学紀要  
一七

平賀元義の門人指導 | 特  
元義の学問とその指導に  
ついて

正務 弘

就実女子大論叢  
九

近世人の近世社会観 | 近世  
人は幕藩支配体制をどう  
見ていたか

衣笠 安喜

日本史研究  
一九九

近世思想史研究に思う

伊東 多三郎

中央史学 二

幕藩制国家と本末体制

高埜 利彦

歴史学研究別冊

大塩の乱と部落住民(下)  
| 考察のための基礎作業

内田 九州男

大塩研究 七

大塩の乱波紋・断章

秦 達之

大塩研究 八

徳川封建体制における国家  
信用と商人信用(その一)  
徳川後期盛岡藩の場合を  
中心として

西岡 久雄

青山経済論集  
三一—一

江戸時代の環境思想に関す  
る覚書

西川 治

東大教養学部人  
文科学紀要六九

江戸時代における「夷」観  
念について

塚本 学

日本歴史三七一

近世中期 | 幕末維新期の農  
民層の政治・社会・経済認  
識 | 2 | 羽州村山郡谷地の  
場合

大藤 修

史料館研究紀要  
一一

近世後期長州藩の賤民外延  
の拡大と後退 | 文政期山口  
の「穢多之事書集」の歴史  
的位相

北川 健

山口県文書館研  
究紀要 六

幕末における攘夷論の諸相

内藤 俊彦

法政理論 一二

万葉代匠記の起筆年次 | 契  
沖と光圀・長流との交流  
を中心に

池田 利夫

文学 四七—七

伊勢貞丈と谷真潮

田中 善信

国文学研究(早  
稲田大学国文学  
会) 六九

本居宣長と儒学

石田 一良

季刊日本思想史  
一一

本居宣長と吉田神道

小山 恵子

季刊日本思想史  
一一

源氏物語と宣長 | 関心の所  
在

渡部 治

倫理思想研究四

宣長学の性格と古事記

梅沢 伊勢三

季刊日本思想史  
一一

宣長の「新古今」理解

田中 裕

季刊日本思想史  
一一

本居宣長と源氏物語

重松 信弘

季刊日本思想史  
一一

「玉勝間」の版本に関する  
一考察 | 本居文庫本「玉勝  
間」について

杉戸 清彬

国語と国文学  
五六—三

本居宣長と伊勢・垂加神道  
| 宣長の思想形成をめぐ  
って

安蘇谷 正彦

季刊日本思想史  
一一

本居宣長の政治意識

岡田千昭

愛知学院大学論叢 一般教育研究 二六―四

磯野響と「新撰和算大全」

赤羽千鶴

信濃 三二―八

宣長学における「学」と「道」の問題

梅沢伊勢三

文芸研究(日本文芸研究会) 九〇

志筑忠雄の「度量考」について―現存史料をめぐる諸問題

大森 實

『近世の洋学』

「本居宣長」補記―承前―本居宣長における道の思想

小林秀雄

新潮 七六―二 倫理学年報二八

吉田光由伝と塵劫記以外の著作

山崎与右衛門

経済学研究 一二―一、二

上田秋成の想世界―3―真淵との思想的対峙

藤原 暹

ノートルダム清心女子大学紀要 三編 国語・国文学編

幕末における和算の独習書について

帆上英明

日本歴史 三七四

上田秋成における儒・仏二教の位相―富永仲基学説との関連について

鷺山樹心

花園大学研究紀要 一〇

近世実学思想史の諸段階とその特色について

杉本 勲

『近世の洋学』

秋成血の思惟の構造―「白峰」と「血かたびら」のよみをめぐって

小 椋 嶺 一

大谷女子大学紀要 一四―一

蕃書調所の以前と以後の古河藩洋学

川島 恂 二

古河市史研究四

伴信友の史学 文化元年の石川雅望―年譜考(5)

森 田 康之助

神道学 一〇〇 高知大・教育研究報告二―三一

申維翰の「海遊録」研究―李朝通信史の日本紀行文

林 性 哲

比較文学研究 三六

藩政担当者の国学受容―片桐春一における国学の機能

松 下 新 市

駿台史学 四八

石田梅岩における天命観の一考察

小 森 信 之

人文学会雑誌 (武蔵大) 一一―一

色川三中管見

水 野 柳 太 郎

茨城県史研究 四二

尊徳語録類にみられる報徳仕法の基本的性格について―新しい尊徳像を求めて

内 山 稔

研究紀要(日大・人文研) 二二

洋学論再構成試論―跡見玄山の場合を手がかりとして

田 崎 哲 郎

思想 六六五

江戸近郊農村における寺子屋の性格―学習内容を中心とする

利 根 啓 三 郎

日本歴史三七三

大目付井上筑後守政重の西洋医学への関心―鎖国初期江戸における西洋医学導入の一形態

長 谷 川 一 夫

『近世の洋学』

井伊大老の天皇・朝廷観―井伊大老論(3)

山 口 宗 之

九州史学 六八

吉田松陰における武士の思想

真田幸隆

季刊日本思想史 一〇

幕末私塾の学規の研究—咸宜園を中心として

関山邦宏

教育研究 二三

赤報隊と農民—維新时期信州小県農民の年貢延納闘争

中島明

歴史評論三五—

「幕末経世論」—横井小楠の教育思想

山崎益吉

高崎経済大学論集 二一—三

『防長回天史』の思想

飛鳥井雅道

人文学報(京大・人文研) 四七

坂本竜馬と南海男—思想と行動の共通性を中心に

吉田曠二

史朋 一五

公議政体論と土佐藩の動向 (1)

亀掛川博正

政治経済史学 一五四

津田秀夫著『近世民衆教育運動の展開』

宮地正人

歴史評論三五—

幕末史の悲劇—孝明天皇と武市瑞山

入交好脩

信濃 三一—八

石川松太郎著『藩校と寺小屋』

倉地克直

日本史研究 二〇—五

幕末における攘夷論の諸相 (1)

内藤俊彦

法政理論 一一—一

高瀬弘一郎著『キリシタン時代の研究』

伊吹一

季刊アカデミー 一五

幕末明治カトリック布教の性格

青山玄

カトリック研究 三五—

大桑齊『寺壇の思想』

岩生成一

社会経済史学 四五—二

幕末・明治初期における本願寺教団とキリスト教

上原英正

比較思想研究六

田原嗣郎『赤穂四十六士論—幕藩制の精神構造—』

中田隆二

北陸史学 二八

維新の変革と幕臣の系譜・改革派勢力を中心に—国家形成と忠誠の転移相克— (1)

菊地久

北大法学論集 二九

佐々木杜太郎著『山鹿素行』

水林彪

史学雑誌 八八—一〇

山村昌永とその『訂正増訳采覧異言』について—幕末における洋学史の一断面

高瀬重雄

論集(金沢経大) 一一—三

寺田泰政著『賀茂真淵—生涯と業績—』

田辺正男

国学院雑誌 八〇—七

吉田松陰の教育実践と思想 その3

村田甚吾

紀要(帝塚山短大) 一六

北岡四良著『近世国学者の研究—谷川士清とその周辺—』

此島正年

国語学 一一六

著書調所の成立事情

二見剛史

日本大学精神文化研究所日本大  
学教育制度研究  
所紀要 一〇

小林秀雄著『本居宣長』

桑野敬仁

国語と国文学 五六—八



森田康之助著『伴信友の思想』

村尾次郎

神道学 一〇三

徳田進著『橘守部の国学の新研究―産業意識と国民文化の形成―及び『橘守部と日本文学―新資料とその美論』

萱沼紀子

国語と国文学 五六―一〇

内野吾郎著『江戸派国学論考』随感

鈴木裳三

国学院雑誌 八〇―四

藤村禪著『楠本碩水伝』

疋田啓佑

中国哲学論集五

近代

天皇制維新観成立史論

田中彰

『近代日本の国家と思想』

天皇制国家と身分制について

後藤靖

日本史研究 二〇六

近代天皇制論

下山三郎

『近代日本の国家と思想』

近代日本における天皇制の意義―「原敬日記」の分析を中心として―

野村乙二朗

政治経済史学 一六二

日本近代文化史学の特質とその展開

菊池克美

歴史評論三五二

民衆宗教における「近代」の相剋―教派神道体制下の金光教

小沢浩

日本史研究 二〇二

明治―大正期の地方青年の思想と行動―地方改良運動における吾妻郡東部の青年会の事例について

小池善吉

群馬大学教養部 紀要 一三

近代仏教教育成立に関する一考察―明治初期・宗派学校の設立過程

中井良宏

指山女学園大学 研究論集 一〇(二)

近代日本における宗教と教育の關係―上―一九〇〇年―一九二五年を中心として

鈴木美南子

フェリス女学院 大学紀要 一四

「王政復古」維新史の編纂とその維新観

田中彰

『近世国家の解体と近代』

変革期における庶民エネルギ―の源泉―博徒―草莽隊―「愛国交親社」の系譜に探る

長谷川昇

思想 六六三

近代天皇制成立期における民衆教化

福島寛隆

伝道院紀要 二二・二三

明治初年における民衆的「国家」構想―窪田次郎の思想・行動をめぐって

頼祺一

史学研究 一四三

西洋文明の導入と明治文化の生成

家永三郎

服装文化 一六四

大正初頭の国体観・皇室観―尾崎の護憲演説・西園寺の違勅問題を中心に

山本四郎

史林 六二―五

近代天皇制国家における即位礼・大嘗祭―一九一四年の大礼使官制論争

田中真人

日本史研究 二〇七

国家帰属意識論考―日本大正期を中心として

富士田邦彦

研究報告(香川大・教育) 四六

天賦人權論争覚え書

松沢弘陽

『近代日本の国家と思想』

加藤弘之における国家と思想

金子洋子

龍谷史壇 七七

西村茂樹とキリスト教

高橋昌郎

日本歴史三七九

西周と「哲学」・粗拙

小玉齊央

駒沢大学外国語部論集 一〇

福沢諭吉の人と思想

津田静男

人文論究(関西学院大学人文学会)二九(一)

福沢諭吉の政治思想形成過程についての一考察―文久渡欧との関連として

長尾政憲

『近世の洋学』

福沢諭吉における経済的自由―とくにその初期について

杉山忠平

思想 六六二

明治二〇～三〇年代における福沢諭吉の思想と行動(上)―『時事新報』社説を通しての考察

小久保義直

政治経済史学 一六三

福沢諭吉における認識の問題―文体・倫理・学問・歴史

安西敏三

論文集(慶大院・法研)一三

福沢諭吉研究ノート―三―

進藤咲子

東京女子大学論集 二九(二)

福沢諭吉「脱亜論」成立の周辺

西尾陽太郎

文理論集(西南学院大) 二〇―一

福沢諭吉の婦人論にふれて―近代日本女性史研究の若干の問題点

ひろたまさき

岡山大学法文学部学術紀要三九(史学篇)

中江兆民の思想における近代的要素と伝統的要素

千徳廣史

研究年報(長谷川仏教文化研) 六

中江兆民の仏学塾と「仙台義会雑誌」

藤野雅己

日本歴史三七八

福地源一郎の政治思想―「漸進主義」の方法と課題

坂本多加雄

思想 六五七

竹越与三郎の歴史観

武田清子

社会科学ジャーナル(ICU) 一七

熊本国権覚え書

水野公寿

近代熊本 二〇

反民権政社の成立と展開―熊本紫瀨会の場合

水野公寿

『近世社会の解体と近代』

フランス革命と秩父事件―地域史と民衆史をめぐって

井上幸治

埼玉民衆史研究 五

秋田事件の新研究(二)―民権運動最初の激化事件として

猪股良夫

秋田近代史研究 二四

緒方直清と民友社

中村青史

紀要(熊大・教育) 二八

若き蘇峰の思想形成―杉井六郎『徳富蘇峰の研究』書評によせて

花立三郎

熊本史学 五二

山路愛山再吟味

西田勝

文学 四七―四

酒井雄三郎の生涯と思想―西園寺公望との関係を問題にしながら

佐々木敏二

紀要(文命館大・人文科学研) 二七

岡倉天心小論

棚倉洋子

北大史学 一九

宮崎滔天の「支那革命」の思想

針生清人

研究年報(東洋大・アジアアフリカ文化研) 一九七八年

宮崎滔天とアジア主義

初瀬龍平

法政論集(北九州大・法) 七―二

熊本バンド・同志社と文学―「同志社文学」の胎動

杉井六郎

文学 四七―四

明治初期キリスト教主義女  
学校の教育について(三)

進化論の受容方法とキリス  
ト教

キリスト教と仏教の出会い  
(明治のキリスト教と文学  
―2―)

国木田独歩とキリスト教  
明治期のトルストイ受容  
―上―

明治大正期のキリスト教文  
学と有島武郎―近代キリス  
ト教文学史への二つの視  
点

新島襄と徳富猪一郎―「同  
志社」大学設立の旨意」と  
新島の遺言について

明治プロテスタントの罪意  
識―植村正久を軸に

キリスト教組織と明治社会  
主義

「教育勅語」と内村鑑三

内村鑑三の非戦の思想と戦  
時下の抵抗

内村鑑三の慈善思想―下―

内村鑑三における「日本」  
―志賀重昂との対称的照  
応

萩原俊彦 文化史学 三五

武田清子 文学 四七―四

久山康 文学 四七―四

山田博光 文学 四七―三

柳富子 文学 四七―三

笹淵友一 文学 四七―四

杉井六郎 文化史学 三五

武田清子 季刊日本思想史 一二

山極圭司 『近代日本の国  
家と思想』

奈倉哲三 歴史学研究 四七四

大島良雄 人文科学研究所  
報(関東学院大) 二

遠藤興一 明治学院論叢 二七三

亀井秀雄 文学 四七

井上毅の教育思想―とくに  
歴史・地理教育政策より

井上毅の教育思想―国体教  
育主義の形成

明治二十年代の教育方法

一九一〇年代における「公  
民教育」に関する実証的研  
究

『明治の英雄像』の意味と  
構造―国定教科書にみる人  
物像の分析

明治仏教の新動向

近代仏教における罪惡觀の  
展開―妙好人・満之・尚江  
をたどって

清沢満之の精神主義―進化  
論的人間観への批判

三人の明治―子規・樗牛・  
満之

妹尾義郎の思想と行動―主  
として研究史的視点から

明治社会主義思想の進展

遠州三倉村と明治社会主義  
付新に発見された片山  
潜・幸徳秋水等の書簡

「大逆事件」の犠牲者森近運  
平の知られざる一面―「火  
鞭」、「新仏教」、「滑稽新  
聞」、「牟婁新報」における

兼重完和 徳山大学論叢 一一・一二

野口伐名 弘前大学教育学部  
紀要 四二

今野三郎 人文科学研究所  
研究紀要(日本  
大学) 二二

新田和幸 北海道教育大学  
紀要第一部C教  
育科学編 三〇―一

亀山佳明 紀要(京大・教  
育) 二五

疋田精俊 智山学報 二八

森竜吉 季刊日本思想史 一二

神戸和磨 真宗研究 二三

小山文雄 文芸 一八―九

吉田静邦 仏教経済研究  
(駒沢大) 八

羽倉一雄 大分大学経済論  
集 三〇―五

杉山金夫 静岡県近代史研  
究

森山誠一 金沢経済大学論  
集 一三―二

続平民政社時代―一一―一二  
完

続日本文学史序説―二二―  
内村鑑三と安部磯雄

〃 一二四―  
幸徳秋水と河上肇

明治期における直接行動論  
者の思想―その社会主義論  
とアナーキズム論

木下尚江論

キリスト教社会主義者安部  
磯雄

関東大震災と文学―震災  
テロルとプロレタリア文  
学

部落問題と「国民教化」政  
策

群馬県の水平運動とキリス  
ト教者清塚良三郎

「老農」思想の成立(下)  
―石川理紀之助の評価を  
中心に

日露戦後経営期における新  
学問の胎動―柳田国男の  
「農村生活誌」

江渡狄嶺(えとてきれい)  
の人と思想―百姓と仏教1

矢吹慶輝の社会思想

荒畑寒村

加藤周一

〃

梅田俊英

後神俊文

辻野功

前田角蔵

天野卓郎

萩原俊彦

佐藤俊介

藤井隆至

斎藤知正

芹川博通

中央公論  
九四一六・七

朝日ジャーナル  
二一―三六

〃

歴史学研究  
四七二

『近代日本の国  
家と思想』

文学 四七―四

日本文学  
二八―六

広島県史研究四

史朋 一五

秋田近代史研究  
二四

社会思想史研究  
三

仏教経済研究八

研究年報(長谷  
川仏教文化研)  
六

沢沢栄一と経済倫理―その  
主観的精神

浮田和民の「帝国主義」論  
と国民教育―明治自由主義  
の系譜

福田徳三と河上肇

河上肇とマルクス主義

河上肇における異端への途

河上肇の「国家論」小考―  
「政治学講義」草稿につ  
いて

河上肇の「自叙伝」―河上  
肇における「没落」と  
「文学」

河上肇と日本共産党

荻生徂徠の贈位問題

大正期婦人解放思想の画期  
点をさぐる

一九二〇―三〇年代日本に  
おける婦人関係立法につ  
いての一考察―婦人の政治的  
権利容認の立法意図を  
めぐって

ファンズム下の婦人運動

山川均論―1―9―

小野健知

武田清子

杉原四郎

杉原四郎

石田雄

住谷一彦

西川長夫

小林栄三

丸山真男

早川紀代

白石玲子

鹿野政直

川口武彦

二〇

日本大学精神文  
化研究所日本大  
学教育制度研究  
所紀要 一〇

国際基督教大学  
学報―A二一

経済論叢(京大  
経済)  
一二四―五・六

現代と思想三六

思想 六六四

経済論叢  
一二四・五・六

思想 六六四

前衛 四四四

『近代日本の国  
家と思想』

人民の歴史学  
六一

阪大法学一一〇

『近代日本の国  
家と思想』

月刊社会党  
二七一―二七九

仏教社会主義の考察—佐野  
学の説を中心として

齋藤 博

仏教経済研究  
(駒沢大) 八

佐野学の社会主義(中) —  
「転向以前」の部

古賀 鶴松

富士論叢(富士  
短大) 二四—一

満州国建国思想とその展開  
—「アグラリア」と「イ  
ンダストリア」

片桐 裕子

論文集(慶大・  
院・法研) 一三

戦前日本における国家主義  
団体の類型

安部 博純

法政論集(北九  
州大・法) 六一—四

『皇国維新法案大綱』抹殺  
論

稲生 典太郎

国学院雑誌  
八〇—一一

尾崎秀実の中国論—日本帝  
国主義による中国支配の  
研究方法をめぐって

浅田 喬二

経済学論集(駒  
沢大) 一一—一

西田哲学と滝沢神学—イン  
マヌエルと三位一体の場  
所

小野寺 功

清泉女子大学紀  
要 二七

ホワイトヘッドと西田哲学  
—「神と世界との関係をめ  
ぐって」

山本 誠作

哲学研究  
四六—七

初期西田哲学における功利  
主義批判

長江 弘晃

日本大学精神文  
化研究所日本大  
学教育制度研究  
所紀要 一〇

戦前↓戦中の「左翼」哲学  
者たちが観た西田哲学の論  
理

船山 信一

理想 五五八

和辻哲郎に於ける比較思想  
の方法—「国土論をめぐって」

兼子 盾夫

比較思想研究六

田辺元における弁証法の展  
開—大正から昭和への思想  
史—

渡辺 和靖

愛知教育大学研  
究報告第一部人  
文学部・社会科学  
部 二八

『断腸亭日乗』ノート—戦  
中・戦後日記の意識史的  
考察

黒羽 清隆

『近代日本の国  
家と思想』

太平洋戦争史論

大江 志乃夫

〃

徴兵制と民衆—徴兵忌避を  
中心として

小森谷 昭平

小山市史研究 1

鹿野政直・堀場清子『高群  
逸枝』

西村 汎子

歴史評論三四七

本郷隆盛・前坊洋・稲田雅  
洋『近代日本の思想』(一)  
—佐久間象山・福沢諭吉  
・植木枝盛

飯田 鼎

三田学会雑誌  
七二—四

坂野潤治「明治・思想の実  
像」

坂本 多加雄

国家学会雑誌  
九二(三・四)

犬丸義一著「日本人民戦線  
運動史」

高橋 彦博

労働運動史研究  
六二

評伝 内村鑑三

鳥井 足隆

あさを社

大正期「革新」派の成立

伊藤 隆

塙 書房

日本社会主義運動思想史  
一八五三—一九二二

糸屋 寿雄

法政大学出版局

高島素之 日本の家社会  
主義

田中 真人

現代評論社

昭和政治思想研究

河原 宏

早大出版部

西田税二・二六への軌跡

須山 幸雄

芙蓉書房

「北一輝」論集

五十嵐 咥郎編

三一書房

昭和五十三年

浦島伝説成立の宗教思想的背景

重松明久

地域文化研究四

記・紀判読―古代教育史断章

土屋忠雄

教育学雑誌一二

平安初期大学教育史における紀伝・文章道の発達と『政治経済史学』の源流Ⅱ  
一遍、「時衆」と「無縁」のかかわり

彦由一太

政治経済史学 一五〇

道元における真如の問題

梅谷繁樹

四天王寺女子大学紀要 一一一

増田立軒の事跡と学問―上  
徂徠における「制度」と「風俗」

杉尾守

山口大学教育学部人文科学叢書第一  
部人文科学・社会科学 二八

貝原益軒の「養生訓」と教育論

藤本雅彦

徳島大学学芸紀要人文科学二八  
待兼山論叢(日本学篇) 一二

西川如見の社会思想―享保期社会思想研究の一擲

古川治

甲子園大学紀要 六

性学思想の受容と変質―大原幽学と門人たち

多田顕

千葉大学教養部研究報告A 一一一

「通俗道徳」の思想構造―「心」の哲学成立の思想的意義

木村礎

明治大学人文科学研究所紀要 一七

逆井孝仁

立教経済学研究 三二―三三

文化元年の出版統制をめぐって―「太閤物」の場合

上保国良

日本大学文理学部研究年報人文・社会科学篇 二七

山岳信仰と芭蕉―「おくのほそ道」を中心として

竹下数馬

立正大学人文科学研究所年報特別号 二

近世開物思想の一考察

島崎隆夫

三田学会雑誌 七一―七五

わが国最初の科学論の成立―帆足万里の場合

武井英明

立正大学教養部紀要 一二

富士谷御杖の思想―ある国学思想

黒沢幸昭

山梨大学教育学部研究報告第一分冊 二九

鈴木重胤と平田党―鈴木重胤暗殺事件の背景

芳賀登

歴史人類 五

「家」観と女子教育思想の展開

河原美耶子

教育学雑誌一二

中村正直における教育的人間像―儒教的人間観とキリスト教的人間観の相克

岡田典夫

教育哲学研究 三七

陸羯南の宗教論

定平元四郎

関西学院大学社会学部紀要三七

高山樗牛における国家と個人―その思想形成と展開

井田輝敏

北九州大学法政論集 六

小野梓とイギリス政治思想―「利学入門」と「国憲論綱」

山下重一

洋学史研究一一

明治社会主義思想の進展

羽倉一雄

大分大学経済論集 三〇―三五

潜「六合雑誌」における片山

辻野功

キリスト教社会問題研究 二七

## 発刊の辞

東北大学法文学部の開設とともに、故村岡典嗣氏を初代の主任教授として日本思想史学専攻が設立せられたのは大正十二年のことである。

昭和二十一年春、村岡氏が定年退官せられて後、後任者の得難きままに九年余を経て、昭和三十年に故竹岡勝也氏が就任せられた。しかし竹岡氏も在職二年にして定年退官せられ、一年を経て昭和三十三年に私が両教授の芳燭をけがすことになった。

本専攻の学部（第三・四年）は「日本思想史学専攻」として文学部史学科に属し、大学院（修士・博士課程）は「国文学国語学日本思想史学専攻」として文学研究科に属している。日本思想史学の独立の講座を基礎として、日本史（国史）専攻、乃至は国文学専攻または倫理学専攻とは別に、独立した「日本思想史学専攻」が設けられているのは、東北大学のみである。

以上の如き本専攻の歴史と現状に鑑み、関係者相い諮って、専攻専属の機関誌として、本誌を刊行し、その研究・教育の状況を学の内外に紹介することにした。大方の御援助を仰ぐ次第である。

昭和四十二年三月

石田一良

### 日本思想史研究

第十四号

昭和五十七年三月十五日 印刷  
昭和五十七年三月二十五日 発行

編集代表者 玉 懸 博 之

仙台市日の出町二丁目四ノ二

印刷所 (株) 仙台共同印刷

仙台市川内

発行所 東北大学文学部

日本思想史学研究室

